

☆年間第5主日(2月4日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (ヨブ記 7章 1-4, 6-7 節)

この地上に生きる人間は兵役にあるようなもの。傭兵(ようへい)のように日々を送らなければならない。奴隷のように日の暮れるのを待ち焦がれ傭兵のように報酬を待ち望む。そうだ、わたしの嗣業(しぎょう)はむなく過ぎる月日。労苦の夜々が定められた報酬。横たわれればいつ起き上がるのかと思ひ夜の長さに倦(う)み、いらだって夜明けを待つ。わたしの一生は機(はた)の梭(ひ)よりも速く望みもないままに過ぎ去る。忘れないでくださいわたしの命は風にすぎないことを。わたしの目は二度と幸いを見ないでしょう。

第二朗読 (使徒パウロのコリントの教会への手紙 9章 16-23 節)

もともと、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。自分からそうしているなら、報酬を得るでしょう。しかし、強(し)いられてするなら、それは、ゆだねられている務めなのです。では、わたしの報酬とは何でしょうか。それは、福音を告げ知らせるときにそれを無報酬で伝え、福音を伝えるわたしが当然持っている権利を用いないということです。わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。

福音朗読（マルコによる福音書 1章 29-39節）

すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。

夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊(あくれい)に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。町中の人々が、戸口に集まった。イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。

朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。シモンとその仲間がイエスの後を追い、見つけると、「みんなが捜しています」と言った。イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

今日は暦の上では立春です。春が始まるのですが、まだまだ寒い日が続きますね。コロナ感染症も流行っているそうなので、気をつけてお過ごしください。さて昨日三日は福者ユスト高山右近殉教者の記念日でした。高山右近は戦国大名の一人で織田信長や豊臣秀吉の重臣として活躍していましたが、キリストの福音を知るに至り秀吉の説得も振り切って、バテレン追放によってその地位を追われ、最後はフィリピンで病死しました。また明日5日は同時代の日本二十六聖人殉教者の祝日です。彼らもキリストの道に従うことこそが最高の生き方と信じて、京都から長崎まで陸路海路を連行され殉教を遂げたのです。私たち日本のキリスト者はその末裔です。時代は変わり同じ信仰を持つものとして彼らに続いて潔く信仰を証しましょう。

第一朗読（ヨブ記 7章 1-4, 6-7 節）

ヨブ記は不思議な物語です。義人ヨブは自分に降りかかる苦難の原因を突き止めようと、人間の理屈を駆使していきますが、最終的には人の一生は神の身許にあることを受け入れるのです。神の前にへりくだることこそ大事なことで悟るのです。AIの時代に生きる私たちは全能感にあふれ、人間のあくなき欲望の中に生きていますが、慈しみ深い神のもとに生きていることを忘れないようにしましょう。

第二朗読（使徒パウロのコリントの教会への手紙 9章 16-23 節）

コリントの教会にはイエスの弟子、使徒ではなかったパウロの身分について疑問を持つ人たちがいたようです。世の中には一生懸命に頑張る人へのやかみのために、本質的なことを忘れていろいろと詮索する人がいるものですね。この様な人々にパウロは苦しめられたのでしょね。しかしパウロはそんなことにはめげずに、キリストを愛するために、キリストを告げ知らせるために必死に宣教活動をしていったのです。「謙虚で、強く、逞しく」と聖ドン・ボスコは言っています。

福音朗読（マルコによる福音書 1章 29-39 節）

イエスの宣教活動はガリラヤ湖畔にあるカファルナウムという小さな村から始まりました。イエスはペトロの姑の病気を癒し、悪霊に取りつかれたものから悪霊を追い出し、多くの病人を癒したとマルコは伝えてくれています。そのことによってイエスはすぐそばに神の国が来ていることを目に見える行いによって示されたのです。その結果イエスにつき従う人やイエスの業を信じられずに毛嫌いする人が出てきたのです。しかしそんなことにはめげずイエスは「私は宣教する。そのために私は出てきたのである」と弟子たちに告げられるのです。ここでもイエスの潔さが現れています。



長崎市 日本二十六聖人殉教地・西坂の丘 (2022年11月)

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光